

田原市図書館ふしぎ文学半島プロジェクト2019
“ふしぎ文学の達人”が選んだ 「アート」 オススメ本

選者：金原瑞人氏（翻訳家・大学教授）

選者コメント

1.『ゴッホ——最後の3年』 バーバラ・ストック作 川野夏実訳 花伝社 2018

◆1888年、南仏のアルルに行ってから死ぬまでのゴッホを描いたグラフィックノベル。ほかの画家との美術・芸術論争、訪ねてきた親友ゴーギャンとのけんか、病院での生活、パリ近郊での日々……など、晩年のゴッホが、シンプルな曲線と、ソフトな色で描かれていく。とくに精神が不安定になって耳を切り落とす場面は色が汨濫して見事だし、「カラスのいる麦畑」を描き変えながら何度も使って、ゴッホの最期を象徴的に表現しているところも素晴らしい。

2.『MUNCH ムンク』 ステフン・クヴェーネラン作・画 枇谷玲子訳 誠文堂新光社 2018

◆19世紀末から20世紀初めにかけて、作品を発表するたびに物議をかもした革新的画家エドヴァルド・ムンクの半生を描いた伝記的なグラフィックノベル。登場人物はムンクをふくめほとんどみんな、思い切りマンガチックな絵で描かれ、起こる事件も、論争も、女性との関係も戯画化されてしまう。かと思えば、ときどき、驚くほどリアルなデッサンで人物や情景が描かれる。ムンクの絵がそっくりに再現されたかと思うと、マンガっぽくデフォルメされて話のなかに取りこまれたりする。そのバランスが絶妙。

3.『えほん・どうぶつ図鑑』 横尾忠則絵 穂村弘文 芸術新聞社 2013

◆世界的に有名なアーティスト横尾忠則の超ナンセンスな絵の数々に、現在大活躍中の歌人・エッセイスト穂村弘が言葉をそえた絵本風アート本……かなあ。ごらんの通り、いくらナンセンスな絵とはいっても、限度ってものがあるだろう、いったいなんなんだこれは、といいたくなる絵・絵・絵の迫力がすごい。このすごい迫力に、うまく脱力的魅力をそえているのがあちこちに散りばめられた言葉。何度ながめてもわからない、何度ながめても飽きない。これって、もちろんアートでしょう。

選者：東雅夫氏（アンソロジスト・文芸評論家）

4.『初稿・山海評判記』 泉鏡花作 小村雪岱画 国書刊行会 2014

◆たんに〈アート〉だけでは何とも茫洋としているので、ここは〈アートと文学のコラボレーション〉を体現する書物に絞って、三冊を選んでみた。近年、相次ぎ充実した展覧会が企画開催されて再評価の機運が高まる日本画家・小村雪岱。その天才肌の本領は、挿絵や装画の分野に何より精彩を放っていた。鏡花幻想文学の一頂点に君臨する謎めいた大作『山海評判記』には、新聞連載時に毎回、工夫と意匠を凝らした雪岱の絵やカットが付けられていたが、本書は史上初めて、それら総てを再現した豪華な大冊である。

5.『中川学圖案繪集 UKIYO』 中川学 玄光社 2018

◆浮世絵の綺想と幻妖の美を受け継いだ雪岱の画風を、現代に継承する描き手の筆頭に挙げられるのが、中川学だ。いまや幻の豪華本『龍潭譚』に始まり『絵本 化鳥』『朱日記』『楳村に目鼻のつく話』など、鏡花作品とのコラボレーションに意欲的に取り組んでいる点も、雪岱との共通点。大胆にして的確な構図、ときに妖艶ときに軽妙な人物たち、綺羅びやかな色彩……初の画集であり、これまでの画業の集大成といってもよい本書によって、その真髄に触れてほしい。

6.『エリック』 ショーン・タン 岸本佐知子訳 河出書房新社 2012

◆絵画から造形、映像作品まで幅広くこなす、オーストラリアの才人ショーン・タン。その作品世界には、異形のものへの愛と共感があふれている。異郷に暮らす不安と希望を幻獣たちのたたずまいに象徴させた大判の『アライバル』や、おばけずきで恐竜好きな少年時代へのノスタルジアに満ちた『夏のルール』も魅力的だが、ここにはタンの美質がミニマムに凝縮されている小品『エリック』を。ことにラスト・シーンは、一度目にしたら二度と忘れられなくなるに違いない（京アニの悲劇に際してタンが寄せた哀悼のイラストにも、最前列にエリックがいました）。

「アート番外編」

ふしぎ文学マスター
お二人以外のゲストにも
オススメ本を
選んでいただきました！



選者：島田尚幸氏（あいち妖怪保存会代表）

7.『画図百鬼夜行』 鳥山石燕画 稲田篤信、田中直日編 国書刊行会 1992

◆現在、妖怪として認識されるモノたちを構成する基礎部分を築いた一人として欠かすことができない、鳥山石燕。それまで水木しげるが描いてきたキャラクタの幾つかの、“元絵”が江戸時代には描かれていたと知り、衝撃を受け、見事にその面白さの深みに嵌められた。自分にとってまさに「元凶」。その後、小遣いを貯めて本書を手に入れた時のことは、生涯忘れられない。扉を開くたび、今でもワクワクする一生ものの一冊。

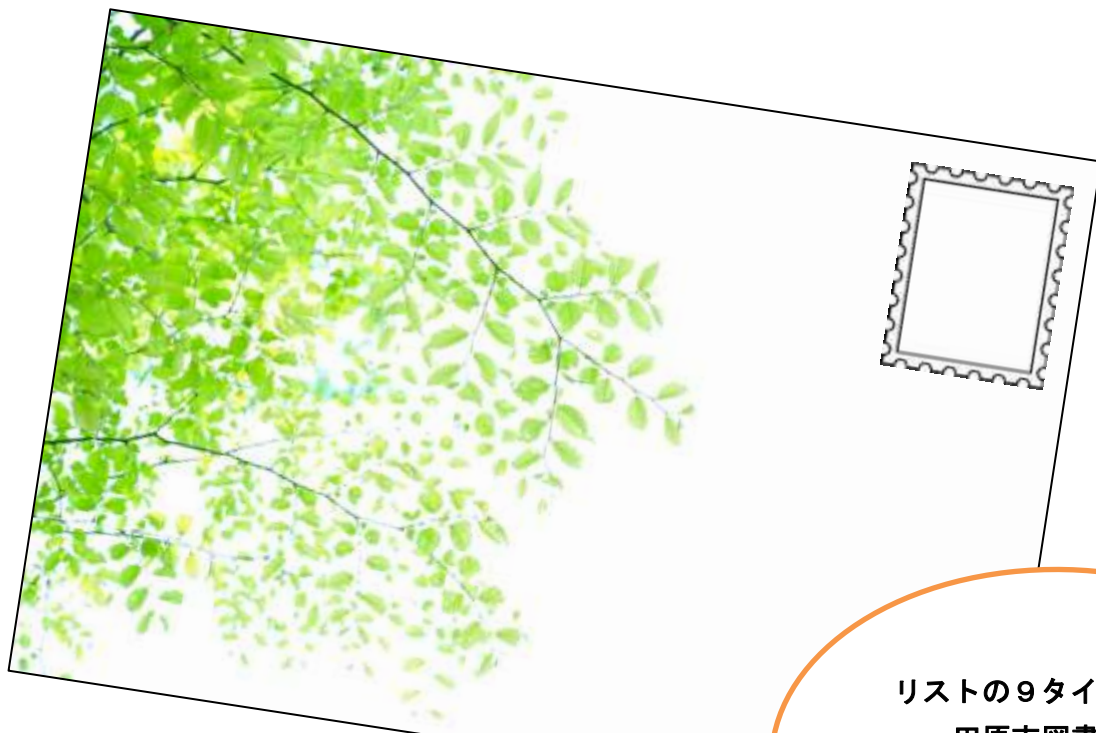
選者：吉野さつき氏（アーツマネージャー・大学教授）

8.『ゴドーを待ちながら』（ベスト・オブ・ベケット1） サミュエル・ベケット 安堂信也、
高橋康也訳 白水社 1990

◆不条理演劇の代表的な戯曲。田舎の、一本の木以外ほかに何もない一本道で、二人の男が「ゴドーさん」をひたすら待っている。それだけ。「ゴドーさん」ではない人が時折やってくるが、何が起こるわけでもない。「劇的」な展開は何一つない。ではなぜ、この戯曲が世界中で多くの有名な演出家によって上演され続けているのか？ゴドーとは一体誰なのか？この「ふしぎ」もまた不条理か？

9.『こびとが打ち上げた小さなボール』 チョ・セヒ 斎藤真理子訳 河出書房新社 2016

◆70年代、軍事政権下の韓国。急激に開発が進む一方で、持つ者と持たざる者の格差が進む。排除と抑圧、欲望と暴力、極めて過激な出来事が描かれているが、悲しい美しさをはらむ寓話のようでもある。お隣の国の過去の物語なのに、不思議とどこか、私が生まれた国の過去のようにもあり、未来を暗示しているようにも思える。四方田犬彦による解説も読み応えがあり必読。



リストの9タイトルは、
田原市図書館で
貸出・予約可能な資料です。
2019.8 作成